



TITLE:

保険担保の法理と実際 - 火災保険
における債権保全の慣行(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

南出, 弘

CITATION:

南出, 弘. 保険担保の法理と実際 - 火災保険における債権保全の慣行. 京都大学, 1963, 法学博士

ISSUE DATE:

1963-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211154>

RIGHT:

【 4 】

氏 名	南 出 弘 みなみ で ひろむ
学 位 の 種 類	法 学 博 士
学 位 記 番 号	論 法 博 第 5 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 12 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	保険担保の法理と実際 —火災保険における債権保全の慣行—

論文調査委員 (主 査)
教 授 大 森 忠 夫 教 授 大 隅 健 一 郎 教 授 上 柳 克 郎

論 文 内 容 の 要 旨

損害保険制度は、単に被保険物件の所有者の利益保護の機能を有するに止まらず、さまざまな形で、当該物件を担保として信用を供与する債権者の債権を保全するいわば担保的機能をも果している。この論文は、このようないわゆる「保険担保」の諸制度の法理と実際に関する研究であって、総論、各論、特殊問題の3編から成っている。

第1編総論では、まずその第1章で、保険制度一般の果たす担保的機能の意義について概説した後、第2章で、損害保険ことに火災保険制度が保険担保の制度として応用される各種の方式ないし形態につき、旧商法制定当時以来今日に至るまでの発展過程を歴史的・立体的に考察し、つぎに第3章において、保険担保の各種の形態につき、それらをさまざまな角度から比較対照的・平面的に概観して、そのそれぞれの特色と得失とを明かにしている。

第2編各論は、火災保険が債権保全の方法として応用される各種の形態についての詳細な各論的研究であって、この論文の中心を成している。すなわちその第1章では、まず保険担保の問題の出発点として、担保物権の物上代位の法則と担保物についての保険金請求権との関係に関し、わが現行法の解釈論ならびに立法論上の問題点を詳細に検討している。第2章では、債権者に保険金受領権限をみとめる「代理受領」（保険金受取方承認）の形態につき、その法律構成とその実効性を中心として論じているが、これに関連して、被保険利益の移転を伴わない保険金請求権のみの処分の可能性に関する理論上の問題を検討している。第3章では、保険担保として今日最もひろく利用される保険金請求権上の「質権設定」の形態をとり扱っているが、ここでは、上述した保険金請求権の単独処分の可能性の問題、異議を止めずして質権設定を承認した保険者が質権者に対抗しうる抗弁の範囲の問題、質権の競合や質権の変動の問題その他、理論上ならびに実務上きわめて重要かつ複雑な多くの問題について詳細に論究している。第4章では、保険金請求権の「信託的譲渡」の形態、ことにいわゆる「抵当権者特約条項」の特殊形態とその得失について論述している。つぎに第5章では、抵当物の火災により債権者自身が直接蒙る損害に対する保険としての

「債権保全火災保険」(抵当保険)につき、その法律構成をめぐる諸問題とその特異点を中心として解明している。最後に第6章では、譲渡担保の目的物につき関係者の有する利益がどのような形で保険されるか、ことに「譲渡担保権者の有する利益の保険」の可能性の問題について、理論面ならびに実際面から詳細な検討を加えている。

第3編は特殊問題と題し、「保険料未収の契約に関する質権設定」以下「不特定期間保険について一火災保険についての導入試案」にわたる6編の論文を収めているが、これらはいずれも、第2編において系統的に論究した各種の保険担保制度に関連してとくに問題となる諸点を重点的にとり上げて、より深くほり下げた諸論文である。

論文審査の結果の要旨

この論文が対象とする「保険担保」の制度が、今日の金融取引上きわめて重要な役割を果たしていることはいうまでもないが、そこでは、保険者・保険契約者・被保険者のほかに、被担保物件の財産的価値によりその利益を担保されている多くの関係者の利害が複雑な形で互いに交錯する。またその法理の面においても、単に保険契約法のみならず、担保物権法・債権法を中心とする民法一般や、強制執行法を中心とする訴訟法から、さらには租税徴収法などにもわたるひろい分野にまたがって、種々の具体的な問題が一体となって生起してくるのであって、その合理的解決が必ずしも容易でないものが少なくない。しかも、これらの諸問題について、断片的な研究はともかく、総合的なまとまった研究は、従来ほとんどなかったといってもよい。この論文は、この困難な課題にとり組んだものであり、著者は、多年にわたる実務上の経験を基礎としながら、関連の著書・論文・判例・実務上の諸資料などを丹念に参照し十分に駆使して、問題点を適確に整理し、これについて実際に即した着実・穏当な見解を述べ、この問題の将来における発展の展望にも及んでいる。この論文が実務界に寄与するのみならず、保険法・担保物権法その他関係法分野における学問的研究の上に貢献・裨益するところまた多大であり、その学問的価値は高く評価されるべきである。よってこの論文は法学博士の学位論文としての価値あるものとみとめる。